歴史散歩

第六回

歴史講座

※動画公開終了しました。

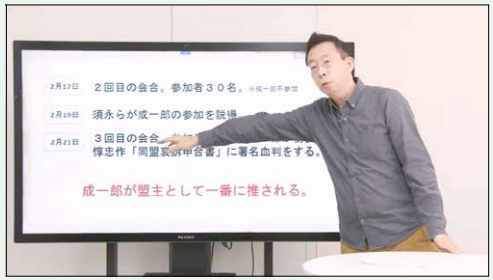
渋沢栄一とその一族 ～渋沢成一郎の戊辰戦争～

校友、在学生、教職員と歴史スポットを訪れてきた「歴史散歩」。今回は「歴史講座」としてオンライン動画で公開され、多くの方が視聴した。講師は、おなじみの関一成先生。収録時は、山本会長をはじめ、校友会の代表が受講生となり、和やかな雰囲気で講義が進められた。

テーマは「渋沢栄一とその一族～渋沢成一郎の戊辰戦争～」。渋沢栄一の生涯を描いた大河ドラマ「青天を衝け」では紹介されなかった興味深いエピソードが数多く散りばめられ、幕末や明治初期へタイムスリップしたような感動を味わえた。

当時の渋沢達の様子を関先生が軽快な語り口で解説。

校友会オンライン 第六回 歴史講座動画



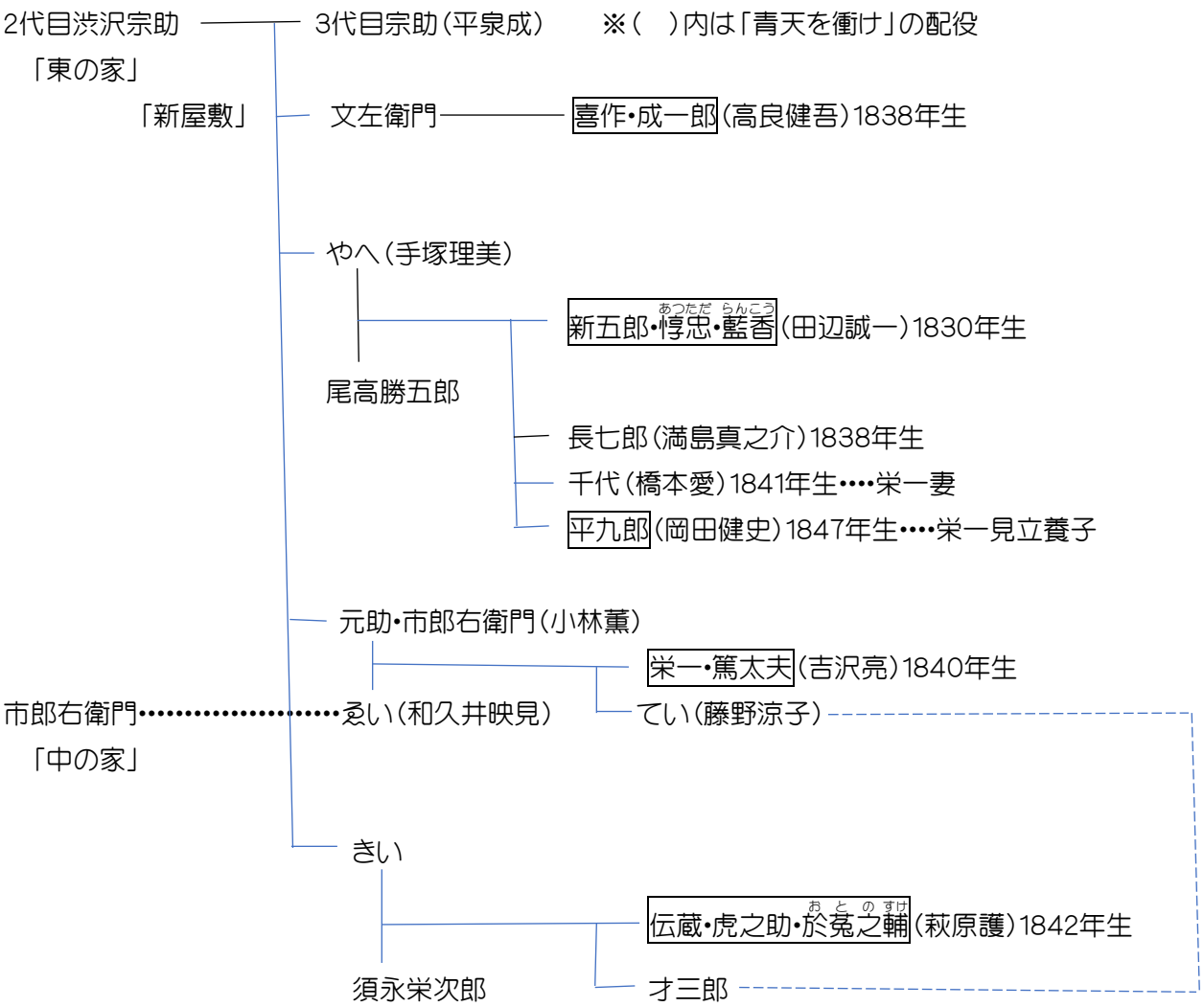
日本大学商学部校友会

渋沢栄一とその一族

～渋沢成一郎の戊辰戦争～

関　一成（江戸文化歴史検定一級）

1　渋沢栄一とその一族



※渋沢家は足利氏の支流、もしくは甲斐源氏逸見氏の流れを汲むともいわれ、天正年間（1573～92）に渋沢隼人が血洗島を開拓して居住したという。（「渋沢栄一伝」）

2　尊王攘夷から一橋家臣、幕臣へ

実家の藍玉業を通じて開国への反発と、水戸学に傾倒した惇忠の影響による尊王攘夷思想を強く持つ。

栄一と喜作は倒幕運動に傾く••••高崎城夜襲、横浜外国人居留地襲撃計画。
　尾高長七郎の反対により中止。（天誅組、生野の変の壊滅）

その後江戸に出た 2 人は一橋家用人•平岡円四郎に見出される。（川村恵十郎の推挙）
元治元年（1864）　京都で栄一•喜作、**一橋慶喜**家臣となる→名をそれぞれ**篤太夫•成一郎**と改める。

同年、慶喜は禁裏守衛総督•摂海防禦（ぼうぎょ）指揮の任に就く•••••強力な兵員が必要だが一橋に軍隊はない。
篤太夫と成一郎は一橋家の御賄領から農兵を募ることを建言し、村々を巡回して農兵の確保に尽力した。
御賄領の中に飯能地域

慶応元年（1865）　篤太夫　勘定組頭並
　　成一郎　軍制所調査組頭　　※2 人の職種が分かれる

慶応2年（1866）　慶喜が徳川宗家を継いだことにより、2 人は幕臣となる。

3　篤太夫と成一郎　運命の分かれ道

慶応3年（1867）　パリ万国博覧会に慶喜の弟•徳川昭武（清水家当主、後に水戸家を相続）が将軍の名代として派遣される。その随行員（会計掛）として篤太夫が選ばれる。
嫡子のいなかった篤太夫は妻千代の弟•平九郎を見立養子とする。

成一郎　陸軍奉行支配調 から 奥祐筆格 に取り立てられる。

10 月　大政奉還　　12月　王政復古の大号令
慶応4年（1868）1月3日　鳥羽•伏見の戦い　　成一郎は目付として出陣
大坂で善後策を練る評議に参加し、敗軍を紀州から船で三河に移送するよう紀州藩に協力を要請。明光丸を借り受け幕臣の帰路の監督に当たった。

4　彰義隊の結成

慶応3年12月　幕臣の伴門五郎、本多敏三郎、須永於菟之輔らが幕閣に建言書を提出。
　「徳川家を中心に全国から有能なものを募り集議所（議会）を作り、挙国一致体制を作る。」

1月6日　慶喜、大坂城を脱出。11 日品川に着く。　　2月6日　成一郎江戸に帰る。

2月12日　慶喜が上野東叡山寛永寺に入り、新政府に謹慎の意を示す。
同日　　雑司ヶ谷の茗荷屋に慶喜に近い幕臣、伴、本多、須永らが会合を持つ。参加者17名。
　「慶喜の嫌疑を晴らし、命を賭して主君を守ることを目的とする集団の結成」　※成一郎不参加。

2月17日　四谷円応寺にて2回目の会合。参加者30名。　※成一郎不参加。
2月19日　須永らが成一郎の自宅へ行き、参加を説得する。尾高惇忠も同席。

2月21日　円応寺にて3回目の会合。参加者67名。成一郎が初参加。
惇忠作「同盟哀訴申合書」に署名血判をする。　<u>※成一郎が盟主として一番に推される。</u>

2月23日　浅草本願寺に130名の参加者が集まり「尊王恭順有志会」を結成。後に**「彰義隊」**を名乗る。
頭取　渋沢成一郎
副頭取　天野八郎
幹事　伴門五郎　本多敏三郎　須永於菟之輔　　※惇忠、平九郎もこれに加わる。

天野八郎　天保2年（1831）生。上野国甘楽郡磐戸村の庄屋出身。江戸に出て男谷精一郎の直心影流を学ぶ。幕臣広瀬家の養子になるが、後に広瀬家を離れ天野姓を名乗る。彰義隊には2月17日の会合から参加。一橋以来の家臣ではないが、隊内 No.2 の地位に就く。

3月11日　旧幕府より彰義隊が公認される。成一郎、若年寄支配使番格に任じられる。
　　彰義隊に経済的な基盤ができる。

3 月13～15日　勝海舟・西郷隆盛会談　江戸総攻撃回避
3 月20日～　新政府内で慶喜の水戸謹慎、田安亀之助の徳川宗家相続と静岡移転が決まる。

5　彰義隊の活躍

浅草本願寺（彰義隊最初の屯所）に、行く先に不安を感じていた幕臣らが噂を聞いて次々と集まり、隊士の数は一気に 300 人を超えた。
平和裡の江戸城開城を目指す勝は頭を痛めたが、当時江戸市中の治安悪化が目立っていたため、彰義隊に江戸市中の警備を命じた。隊士らは朱文字で「彰」や「義」と記された提灯を持って市中を巡邏、以来治安は改善し、江戸の庶民らは彰義隊を歓迎した。3 月中に彰義隊は屯所を上野の**東叡山寛永寺**に移す。

6　彰義隊の内部抗争　成一郎派と天野派の対立

渋沢成一郎派		天野八郎派
慶喜の助命と汚名を雪ぐこと 隊士は一橋家臣及び幕臣の限る 新政府軍と一戦交えるにも江戸は不利　日光へ 江戸の豪商から金穀を供出させる	×	**徳川家の存続と幕府の再興** 目的に賛同するなら誰でも入隊 江戸での人気→彰義隊、両御番席格に取り立てられるとの風評

4月11日　慶喜が寛永寺から水戸に退く。→<u>慶喜警護という大義を失う。</u>

素性の知れぬ隊士が多くなり、市中で乱暴狼藉に及ぶような状況を見て、成一郎は江戸を離れることを提案するが天野はこれを聞き入れず、天野派により成一郎が襲われる事態となった。

成一郎派　上野に籠る理由もないので約100名が天野派と決別。上野を離れる。
「官軍とならざること」「官軍に降伏せざること」を約束。

天野八郎派　寛永寺門跡輪王寺宮公現法親王を警護するために、引き続き上野に立て籠る。

輪王寺宮　寛永寺と日光山輪王寺の座主を兼ねる一品(いっぽん)法親王。還俗すれば天皇に即位することも可能。
13代公現法親王は伏見宮家の出身であるが、10～12代の輪王寺宮は有栖川宮出身であった。
だが、実際に寺務をとるのは執当という役職の僧で、当時の執当は覚王院義観。義観ははじめ穏健的な考えで、自ら輪王寺宮と駿府まで出向き、慶喜の助命を嘆願する。しかし総督の有栖川宮熾仁親王や西郷らに相手にされなかったため、主戦派に転じ、彰義隊に協力した。

7　振武軍結成

閏4月11日　成一郎と同志、寛永寺を離れる。
同志の中には惇忠、平九郎も含まれており、成一郎は隊名を**振武軍**とした。
「振武軍は渋沢精(ママ)一郎事変名大寄隼人を総隊長とし、慶応四年五月一日より田無村の西光寺に本陣を構え、凡そ三〇〇人余が屯集して」(「大和町史研究第4号」)　(左下写真は田無山総持寺・旧西光寺)

振武軍は田無村に駐屯したのは、付近の村々から軍資金を供出させるという目的があった。
→武州多摩・狭山丘陵一帯は天領(幕府領)

田無組合、拝島組合、日野組合、府中組合、上布田組合、所沢組合、扇町屋組合の村々から総計3600両の軍用金を集めることに成功した。

振武軍からの要求に応じたのは裕福な在方商人層だが、彼らは要求額の全額には応じず、申し付けられた 1/4 程度しか差し出していない。

◎他の近隣の村々へ振武軍からの要求額(実際に払った金額)

野口村	百姓源次郎	20両(5両)	廻田村	名主彦右衛門	20両(10両)	高木村	名主庄兵衛	50両(10両)
高木村	百姓清五郎	20両(7両)	高木村	百姓代宇兵衛	20両(5両)	粂川村	年寄太座衛門	100両(20両)
粂川村	百姓代助左衛門	150両(50両)	粂川村	組頭伊兵衛	50両(10両)	所沢村	百姓弁蔵	100両(30両)
所沢村	百姓伝右衛門	150両(50両)	所沢村	百姓孫七	100両(30両)等々	(「大和町史研究第4号」)		

しかし、振武軍もそれ以上要求するわけでもなく、丁寧に領収証を渡してその場を収めている。
成一郎たちにとって、軍資金以上に重要なものは時間だった。

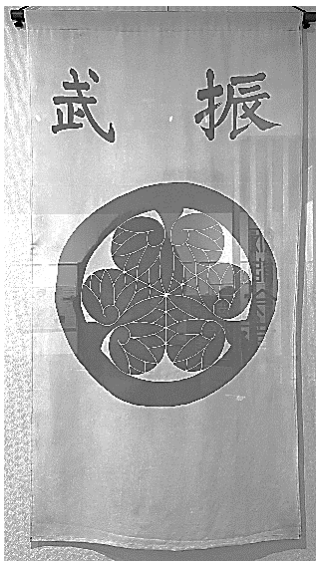
8　上野戦争で彰義隊敗北

5月12日　振武軍は田無村を出発。箱根ヶ崎村に陣を張る。円福寺など4ヶ所に分かれて総勢300名が宿陣。
　江戸では
5月15日　新政府軍、上野の彰義隊に総攻撃を仕掛け**上野戦争**が起こる。一時、彰義隊は優勢に立つも夕方には新政府軍の勝利が決まる。彰義隊、輪王寺宮は敗走する。

斥候からの早馬で開戦を知った成一郎は、彰義隊に味方するため、深夜0時過ぎに全軍を江戸に向け出発。
5月16日　振武軍は小川、田無を経て高円寺村まで行ったところで彰義隊の敗北を知る。
敗走した彰義隊の一部は護国寺で休んだあと、田無村まで逃げてくる。
高円寺から引き返してきた振武軍と敗走彰義隊が合流する。総数500人ほどになる

9　飯能戦争

（振武軍隊旗→）



5月18日　振武軍が飯能に入る。能仁寺、智観寺など6ヶ寺に分かれて駐屯する。

5月20日　振武軍追討にため、大村、筑前、備前、佐土原、久留米の各藩2000の軍勢が出兵。
「…五藩およそ人数弐千余江戸方出立田無村泊り、尤も賄い方として江川太郎左衛門様御手附大井田源八郎殿お付き添いにて、田無村へ焚出し方仰せ付けられ、蔵敷組合までも同村へお呼び出しに相成り、兵食賄い方助け合い申し付けられ候」（「里正日誌」）

5月23日　飯能村で未明より振武軍と新政府軍との間で戦いが起こる。
「廿三日昼後戦争は相果て、脱走兵（振武軍）は諸方へ散乱いたし候由、兵火のために飯能村街並み荒々焼失、黒田侯の菩提寺能仁寺、中山侯の菩提寺中山村智観寺・真応寺兵乱のために焼亡す。双柳村衆浄寺・前田村玉宝寺ほか民家五六軒焼失…」（「里正日誌」内野杢左衛門）

新政府軍が半日で勝利を収めることができた要因は、兵数の差もあるが、装備していた武器の差が大きい。
大砲で攻撃を加えた新政府軍に対し、振武軍側は小銃しか装備していなかったと思われる。

◎飯能の人たちは振武軍をどう見ていたのか？
地元の飯能市立博物館では、新政府軍が町や寺を焼討にしたのは飯能の人々が振武軍に同情的であり、宿舎や衣服などを提供し佐幕的な対応を見せたからではないか、としている。飯能が天領（一橋家の賄料地）であったことが、住民を佐幕的な心情に寄せたと言える。

●飯能の人々が振武軍に同情する一例••••渋沢平九郎の戦死を悼む。　脱走様と慕う。
同じ天領でありながら、田無村と飯能村での住民の対応の温度差＝江戸との距離感

誠一郎と惇忠らは地元民の助けもあって新政府軍の包囲網をかいくぐり、草津まで逃げて身を隠し、やがて郷里の深谷に帰ったという。（この間の正式な記録はない）

10　榎本艦隊への合流　彰義隊再結成

慶応4年7月頃　品川沖に停泊していた**榎本武揚**率いる旧幕府艦隊の元に、彰義隊隊士ら上野戦争敗走兵らが集まる。成一郎も同志 35 人ほどを引き連れ乗船。

榎本の仲介により成一郎派と天野派が和解。成一郎は再び彰義隊200余人の「頭」となる。
※天野八郎は上野戦争後、逃亡中に潜伏先の本所で捕縛され、11 月 8 日に獄中死する。

8月19日　**徳川家達**（田安亀之助）の駿府城到着（15 日）をまって、艦船8艦出航。→会津応援。
旧幕府海軍650人、松平太郎以下旧幕府陸軍、諸隊450人、脱走仏軍人ブリュネ、カズヌーヴら。

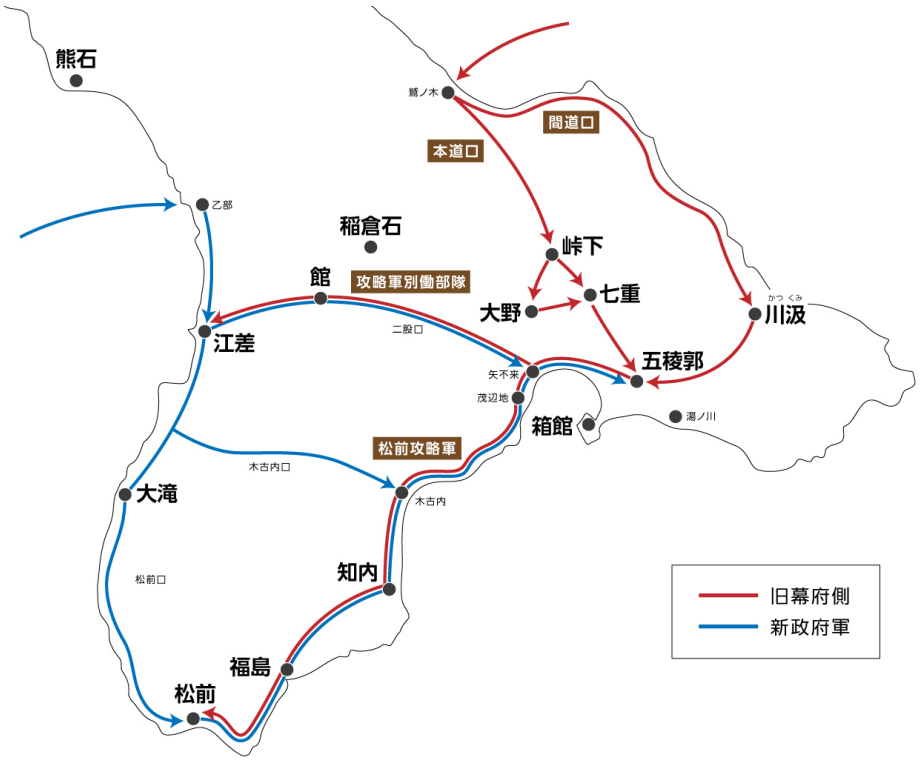
8月23日　会津藩、籠城戦に入る。榎本艦隊間に合わず。
8月24日～9月18日　仙台領松島湾に6艦到着。　※嵐で「三嘉保」「咸臨」を失う。

仙台に続々と旧幕府方諸隊が集まる。仙台は**奥羽越列藩同盟**の盟主であり、榎本は新選組の**土方歳三**、陸軍隊の春日左衛門、遊撃隊の人見勝太郎、彰義隊の成一郎らと、同盟軍の軍議に出席。
9月8日　成一郎は彰義隊を率いて福島へ出陣。途中の桑折で会津から来た伝習隊の**大鳥圭介**と会う。
成一郎らは仙台へ戻り、全軍で会津救出を協議する。
仙台藩は恭順を固める←榎本、土方が説得するが叶わず、奥羽越列藩同盟は崩壊。

9月15日　榎本と大鳥が会談し、希望者で蝦夷地に渡ることを決定する。榎本の蝦夷渡航は元々の計画であり、勝海舟にもこれを訴えていた。
「榎本釜次郎来訪。軍艦、箱館行きの事、談これあり」（「海舟日記　閏4月23日」勝海舟）

11　蝦夷上陸　箱館・松前攻略

10月12日　榎本艦隊、折浜（宮城県）を出航し蝦夷に向かう。約3000人。
10月19日　蝦夷内浦湾の鷲ノ木に上陸。五稜郭に向けて陸路進軍をはじめる。箱館府、津軽、松前藩の抵抗があったものの、10月26日五稜郭に入城を果たす。
10月27日　「彰義隊、陸軍隊、額兵隊、松前に向て出張し土方歳三之を総括せり」（「南柯紀行」大鳥圭介）
　　「彰義隊渋沢成一郎ハ先鋒トナル額兵隊次ク」（「函館戦史」丸毛靱負）
成一郎は土方の下に就き、松前城の攻略に向かった。



11月3日　「先鋒進ミテ福島に戦フ。渋沢成一朗衆を指揮して奮戦」（「北国戦争概略衝鋒隊之記」今井信郎）

11月5日　松前城攻防戦に旧幕府軍勝利。土方が彰義隊、衝鋒隊、守衛新選組を率いて入場。

12　彰義隊の分裂

11月9日　「彰義隊長渋沢成一朗、軍律二違反し免官ス」（「北国戦争概略衝鋒隊之記」）

11月11日　「渋沢成一郎、故ありてこれが長を廃し、頭取菅沼三五郎代わりて長たり」（「北洲新話」丸毛靱負）

彰義隊士の寺沢儀太郎「幕末秘録」によれば、松前城を攻略した際、敵兵が城に火をかけて逃げたため、味方が消火に当たるところ、成一郎は配下に命じて金蔵から金銭を運び出しこれを横領したという。

11月13日　菅沼率いる彰義隊が土方の命令により江差へ進軍。成一郎ら50数名は松前に残留。

江差攻略の後、箱館に帰還するものの彰義隊は五稜郭に入れず、10日間近くを有川に留め置かれる。

12月頃、榎本の仲介によって彰義隊を二つに分け、成一郎の分隊を「小彰義隊」とする。

小彰義隊　頭・渋沢成一郎　30～80人

（大）彰義隊　頭・菅沼三五郎、池田大隅守　200～300人

12月15日　箱館政府の閣僚を士官以上の入札によって決める。

総裁・榎本武明　副総裁・松平太郎　海軍奉行・荒井郁之助　陸軍奉行・大鳥圭介　陸軍奉行並箱館市中取締裁判局頭取・土方歳三　箱館奉行・永井尚志　開拓奉行・沢太郎左衛門　等々

※成一郎は江差奉行兼（「南柯紀行」）、陸軍奉行添役（「蝦夷錦」荒井宣行）になったという。→幹部に留まる

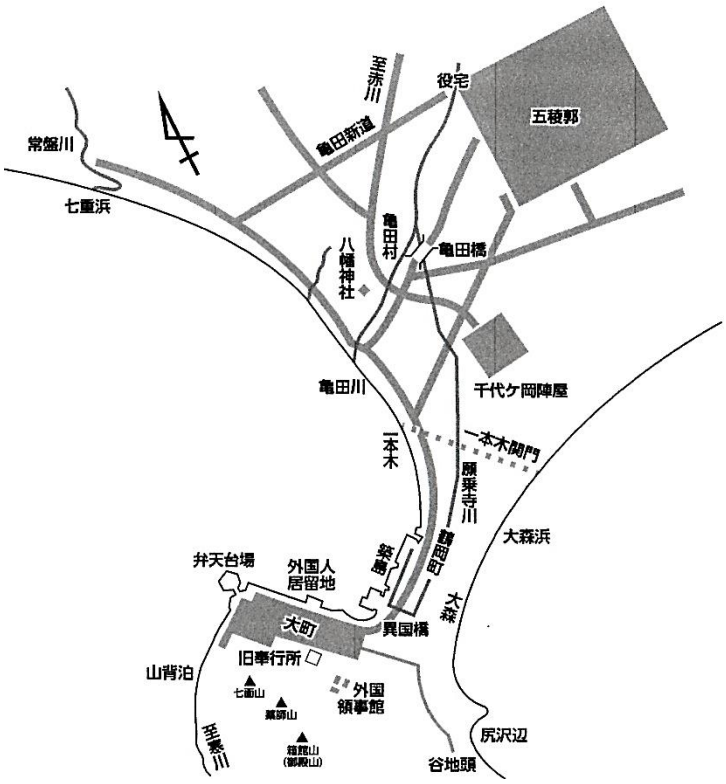
渋沢成一郎は、戊辰戦争における自らの行動を記録しておらず、後年書き残すこともせず、また史談会などの場で話すことも無かった。そのため、彼の当時の行動は周りの人々の証言によってのみ評価されていることに注意しなければならない。

13　箱館戦争

明治2年（1869）4月9日　新政府軍1800人、乙部に上陸。二股口、木古内口、松前口の3方から進軍。

※このとき新政府軍の指揮を執ったのは、長州の**山田顕義**である。

両軍の戦いは、最初旧幕府軍が優勢であったが、12日、16日に新政府軍側が新たな兵員を上陸させ次第に戦いを有利なものへと変えていった。既に旧幕府側は「開陽」を嵐で失っていたため新政府軍に制海権も握られており、17日には艦砲射撃による攻撃で松前が陥落した。大彰義隊は松前口、木古内口で戦ったが21日までに茂辺地にまで撤退している。
旧幕府側で勝利を収めていたのは、土方歳三が率いる二股口の守備隊だったが、木古内に次いで矢不来が落とされると、孤立してしまうため止む無く撤退した。



5月11日　新政府軍が箱館総攻撃。
大彰義隊　五稜郭の北側の赤川に衝鋒隊、遊撃隊らと共に布陣していたが、激戦の末に五稜郭に退く。
同日　弁天台場に孤立した新選組を救出するために出動した土方歳三が一本木関門にて戦死。
小彰義隊　一本木関門奪還に伝習士官隊らと戦うが叶わず、千代ヶ岡陣屋に入る。

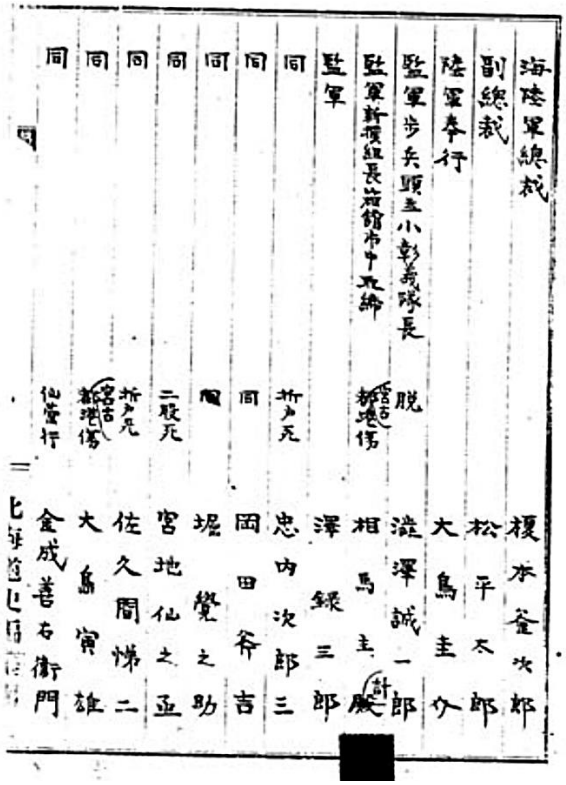
成一郎ら小彰義隊は千代ヶ岡陣屋を出て、15日の夜「五稜郭裏門の番兵たりしが、隊長渋沢誠一郎、兵隊ことごとく引き集めて郭内を忍び出で、義に背いて官軍に降る。」（「蝦夷錦」）→小彰義隊は脱走？

しかし、他の証言として
「その夜渋沢誠一、松平・中島の問答を聞き黙し居たりしが、如何思いけん、部下の士林清五郎初め数十人を随え、湯ノ川に脱走す」（「蝦夷之夢」今井信郎）
「渋沢成一郎・津田主計等最初より衆に先達て激論せし者なるが、此隙に至り竟に臆(おじ)い念発り窃かに脱走す」（「説夢録」石川忠恕）→小彰義隊は湯ノ川へ脱走？

5月18日　榎本武明ら降伏。箱館戦争終結。
5月22日　室蘭にいた開拓奉行の沢太郎左衛門ら降伏。6月11日に箱館に出頭。

6月18日　成一郎ら小彰義隊、箱館に出頭。
7月5日　沢と成一郎が一緒に東京に送還され、辰口の糺問所に入れられる
　「澁澤誠一郎ハ湯ノ川ト申所江出張致シ居、六月十八日伏罪仕」（「陸軍裁判所記」明治4年12月記）
※成一郎は湯ノ川へは脱走ではなく出張と証言し、榎本らもこれを認めたと推察できる。

「箱館脱走人名」で成一郎の肩書は「監軍歩兵頭並小彰義隊長」となっており、榎本武明、松平太郎、大鳥圭介に次いで4番目に記載されている。→旧幕府軍内部で成一郎が高い地位にいて、周囲もそれを認めていた可能性。



14　その後の渋沢成一郎

明治5年（1872）正月　赦免。大蔵省に出仕していた栄一に引き取られ、名前を喜作に戻す。

3月28日　大蔵省勧農寮七等に出仕。栄一の推薦による。主に養蚕・蚕糸関連の業務に就く。4月には富岡製糸場への出張。10月イタリア派遣。

明治新政府のトップは公家と下級藩士や浪人の集まりであり、行政の実務は旧幕臣に頼らざるを得なかった。旧幕臣らは縁故採用という形で新政府に出仕したが、早くから恭順を示した者よりも榎本、大鳥、新井らのように箱館戦争まで抵抗した者たちの出仕率の方が高い。これは箱館までの戦争が、彼らの存在や能力を新政府に十分認知されるきっかけとなったからではないだろうか。

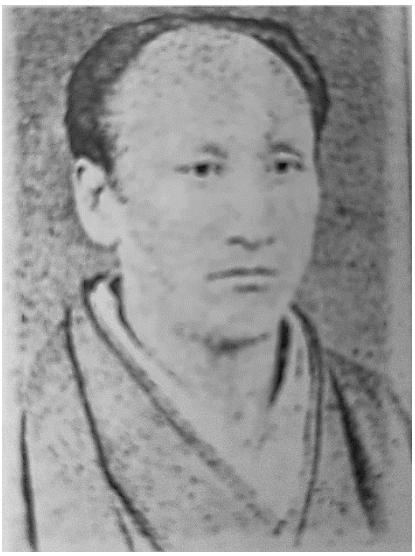
（←「箱館脱走人名」間宮魁）

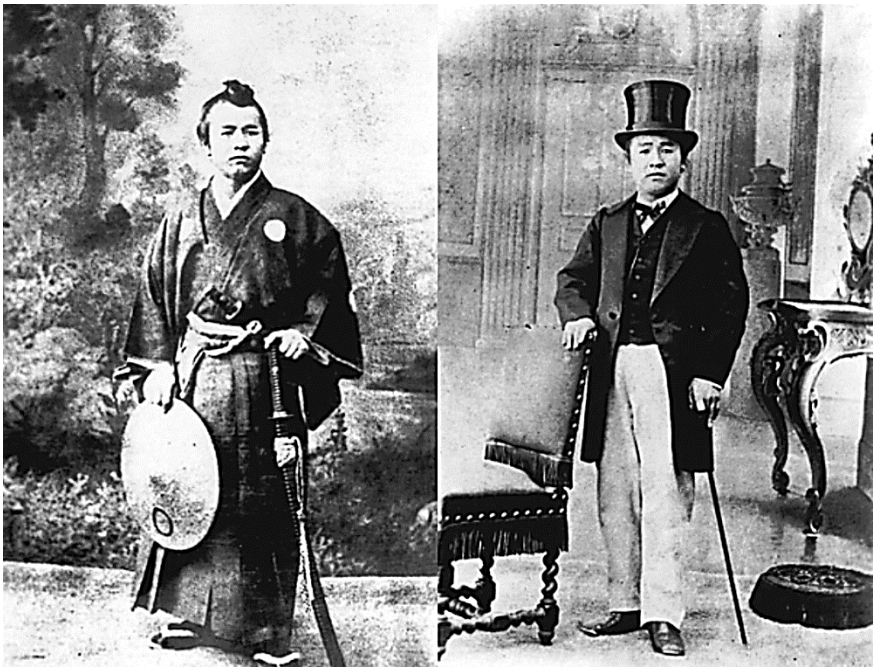
写真資料

渋沢喜作（成一郎）

「渋沢は身長（みたけ）高く、頭は丸坊主で、眼光炯々（けいけい）人を射て、一見上野山王台にある、彼の西郷の銅像と云ったような立派な偉丈夫であるから、皆その威風の堂々たるに壓されて、我々の首領と仰がんには、かかる人をこそ」「大兵肥満の身」（「幕末秘録」）

尾高惇忠





渋沢栄一

渋沢平九郎